

基礎マクロ練習問題：消費

日野将志 *

目次

1	ケインズ型消費関数	2
1.1	消費に対する乗数効果	2
1.2	財源	2
1.3	乗数効果	3
2	2 期間モデル	4
2.1	スライドの確認	4
2.2	計算問題	4
2.3	予算制約の違い	5
2.4	相対価格と利子率	6
2.5	後ろ向きの解き方	6
2.6	様々な効用関数	6
2.7	財政政策	8
3	発展：課税政策の分析	9
3.1	消費税 1	9
4	3 期間モデル	10

* タイポや間違いに気付いたら教えてください。

※分数が出てきたとき、議論の本質と関係ない問題ばかりなので、分母は非ゼロとして議論して良いとする。

1 ケインズ型消費関数

1.1 消費に対する乗数効果

$\alpha_1 \in (0, 1)$ に対して,

$$\begin{aligned}C &= \alpha_1 Y + \alpha_2 \\ C + I + G &= Y\end{aligned}$$

とする。

このとき、政府支出の消費に対する効果を dC/dG を計算し答えよ。

1.2 財源

授業では政府支出 G の財源がどのように調達されるか議論しなかった。これは暗黙に、政府は国債を発行することでお金を借りてくることで、税によって調達はしないと仮定していたからである。以降では、問題で与えられる消費関数と、資源制約式、

$$C + I + G = Y$$

を用いて、それぞれの間に答えよ。

なお、ここでは $\alpha_1 \in (0, 1)$ とする。

1.2.1 租税乗数 1

次のような消費関数を考える。ここで T は所得税を意味する。

$$C = \alpha_1(Y - T) + \alpha_2$$

T が減少すること、つまり所得減税を考える。このとき dY/dT を求めよ。なお、これと授業スライドで学んだ乗数効果を比較せよ。

コメント： dY/dT は租税乗数などと呼ばれます。

1.2.2 租税乗数 2：政府の予算制約

問題 1.2.1 を発展させて次のような環境を考える。まず、先ほどと同様に政府の財源として所得税 T が次のように課されたとする。さらに、この所得税の税収と政府支出は常に一致するとする。これらは方程式で書くと次のようになる。

$$\begin{aligned}C &= \alpha_1(Y - T) + \alpha_2 \\ G &= T\end{aligned}$$

このとき、 dY/dG はどのような値になるか計算してみよ。また、乗数効果のような解釈を簡単に述べよ。

1.2.3 消費税

また問題 1.2.1 のような環境に戻ろう。次のような消費関数を考える。ここで τ^c は消費税を意味する。

$$(1 + \tau^c)C = \alpha_1 Y + \alpha_2$$

τ^c が減少すること、つまり消費減税を考える。このとき $dY/d\tau^c$ を求めよ。

1.2.4 消費税 2：政府の予算制約

政府の財源として消費税 τ^c が次のように課されたとする。

$$\begin{aligned}(1 + \tau^c)C &= \alpha_1 Y + \alpha_2 \\ G &= \tau^c C\end{aligned}$$

このとき、 dY/dG はどのような値になるか計算してみよ。また、乗数効果のような解釈を簡単に述べよ。

1.3 乗数効果

授業ではケインズ型消費関数の限界消費性向 α_1 が高いほど乗数効果が高いと述べた。これを微分を使って証明してみよ。

2 2 期間モデル

これ以降では、 c_1 と c_2 はそれぞれ 1 期と 2 期の消費を表すことにする。

2.1 スライドの確認

スライドで扱った対数効用関数の場合を使って、 $\beta(1+r) = 1$ かつ $y_1 = y_2$ のとき $s = 0$ かつ $c_1 = c_2$ となることを確認せよ。なお、 $r > 0$ (または $\beta < 1$) とする。

2.2 計算問題

2.2.1

予算制約は授業と同じ

$$\begin{aligned}c_1 + s &= y_1 \\ c_2 &= y_2 + (1+r)s\end{aligned}$$

とする。このとき、次の問いに答えよ。

- $y_1 = y_2 = 1$ とする。さらに利子率 r は 0 とする。効用関数は

$$u(c_1, c_2) = \log c_1 + \log c_2$$

であるとする ($\beta = 1$)。このとき (c_1, c_2, s) を求めよ。結果について、1、2 行程度の解釈を加えよ (特に s について)。

- $(y_1, y_2) = (1, 2)$ とする。さらに利子率 r は 0 とする。効用関数は

$$u(c_1, c_2) = \log c_1 + \log c_2$$

であるとする ($\beta = 1$)。このとき (c_1, c_2, s) を求めよ。結果について、1、2 行程度の解釈を加えよ (特に s について)。

- $(y_1, y_2) = (2, 1)$ とする。さらに利子率 r は 0 とする。効用関数は

$$u(c_1, c_2) = \log c_1 + \log c_2$$

であるとする ($\beta = 1$)。このとき (c_1, c_2, s) を求めよ。結果について、1、2 行程度の解釈を加えよ (特に s について)。

コメント：これらの問題を、一々解くのも練習には良いですが、効率的に答える方法も考えてみましょう。

2.2.2 計算問題：弾力性

引き続き対数効用 $\log(c_1) + \log(c_2)$ を使って、消費の所得弾力性を計算してみよう。例えば今期の消費 c_k の今期の所得 y_j に対する弾力性を

$$\epsilon_{kj}(y_1, y_2) = \frac{\partial c_k(y_1, y_2)}{\partial y_j} \frac{y_j}{c_k(y_1, y_2)}, \quad j, k \in \{1, 2\}$$

と定義しよう。なお、この弾力性は「所得が 1% 変化した時に、消費が何 % 変化するか」を表している。なお $k \in \{1, 2\}$ 期の消費 c_k は (y_1, y_2) の関数なので、 ϵ_{kj} も (y_1, y_2) の関数であることに注意すること。さらに先ほどと同様に $r = 0$ とする。次の問に答えよ。

- 今期の消費 c_1 の今期の所得 y_1 に対する限界消費性向を求めよ。仮に、 y_1 の増分が非常に小さい値 Δy_1 とすると、消費はどれだけ伸びるか
- 弾力性 ϵ_{11} を計算せよ
- $(y_1, y_2) = (1, 2)$ とする。このときの ϵ_1 の値を求めよ。そしてこの意味を 1 行で書け。そして、限界消費性向とどこが異なるか書いてみよ。
- $(y_1, y_2) = (1, 2)$ とする。このときの c_1 の値を求めよ。さらに、 y_1 が 1% 増えるとする。このとき、再度 c'_1 を求めよ。この二つの c_1, c'_1 の消費の変化率を求めよ。それぞれ、この変化率は弾力性と限界消費性向のどちらに対応しているか。

2.2.3 計算問題：所得の大小と消費の大小

同様に次のような問題を考えてみよう。予算制約は

$$\begin{aligned} c_1 + s &= y_1 \\ c_2 &= y_2 + (1 + r)s \end{aligned}$$

とする。

効用関数は

$$\log c_1 + \beta \log(c_2)$$

とする。

$y_1 = y_2 = 1$ とする。このとき、どのようなときに、貯蓄 s が正になるか、負になるか条件を述べよ。さらに、消費が成長するかどうかの $(c_2 \geq c_1)$ 条件も述べよ。

2.3 予算制約の違い

スライドでも記したように、予算制約を 2 本で書いても、1 本で書いても最大化問題の解は同じになる。このことを、次の最大化問題を

$$\begin{aligned} \max_{c_1, c_2} & u(c_1) + \beta u(c_2) \\ \text{s.t.} & c_1 + \frac{c_2}{1+r} = y_1 + \frac{y_2}{1+r} \end{aligned}$$

を解いて確認せよ。

つまり、

- 同じオイラー方程式が導けることを確認せよ。
- 次に $u(c) = \log(c)$ を仮定して、この最大化問題を解くと、スライドの (c_1, c_2) と同じ消費が得られることを確認せよ。

2.4 相対価格と利子率

授業では今期と来期の価格を明示的には導入しなかった。そこで次のような最大化問題を考える。

$$\begin{aligned} \max_{c_1, c_2} & u(c_1) + \beta u(c_2) \\ \text{s.t.} & p_1 c_1 + s = p_1 y_1 \\ & p_2 c_2 = p_2 y_2 + s \end{aligned}$$

ここでは c_1 は 1 期の購入数量であり、 p_1 は価格であるので、 $p_1 c_1$ が 1 期の支出金額となっている。 p_2 と c_2 についても同様。

仮に $(1+r) \equiv p_1/p_2$ という変数を定義しよう。このとき、授業で習った場合とどう異なるか比較せよ。

2.5 後ろ向きの解き方

動学的な最適化は、今までとは異なる解き方でも解けることを示す問題として次のことを考えよう。スライドと次の同じ問題を考える。

$$\begin{aligned} \max_{c_1, c_2, s} & \log c_1 + \beta \log c_2 \\ \text{s.t.} & c_1 + s = y_1 \\ & c_2 = (1+r)s + y_2 \end{aligned}$$

これを次のように『後ろから』解いてみよ。

- 最初に、次のような 2 期の問題を考える。

$$\begin{aligned} V(s) &= \max_{c_2} \log(c_2) \\ \text{s.t.} & c_2 = (1+r)s + y_2 \end{aligned}$$

ここで、 s は 2 期においては所与である*1。

このとき、 c_2 を求めよ。つまり c_2 は s, β, r, y_2 の関数になるはずである。

そして、それを目的関数に代入することで、 $V(s)$ を求めよ。

- 次に、1 期の問題を考える。

$$\begin{aligned} \max_{c_1, s} & \log(c_1) + \beta V(s) \\ \text{s.t.} & c_1 + s = y_1 \end{aligned}$$

なお $V(s)$ は上で解いた関数形を代入すること。その下で、最適な c_1 と s を求めよ。

このとき、スライドの c_1, c_2, s と比べて、異同点を 1, 2 行で議論せよ。

2.6 様々な効用関数

以下では様々な効用関数の下で、同様の問題を解くことが目的です。

$$u(c_1) + \beta u(c_2)$$

*1 所与とは、外生的に与えられているということ

の u の関数形を次のように色々と変えてみる.

コメント：解く際に $Y \equiv y_1 + \frac{y_2}{1+r}$ と定義すると便利である.

2.6.1 対数効用関数

授業で扱ったと似た効用関数として次のような効用関数を考えよう.

$$u(c) = \alpha \log c$$

ここで $\alpha > 0$ (かつ $\sigma \neq 1$) は外生変数である.

- この最適化問題を書け
- オイラー方程式を導け
- このときの消費と貯蓄 (c_1, c_2, s) を解いてみよ
 - コメント：「 x を解いてみよ」や「 x について解け」と言った際、それは $x = f(a, b, c)$ のように左辺に x のみがあり、右辺にはパラメータ (a, b, c) だけが存在するようなものを指します.
 ここでのパラメータは β, r, y_1, y_2 です. そのため、 $s =$ という式の右辺には β, r, y_1, y_2 のみが出てきて、 c_1, c_2, s は出てきてはいけません.
- $\beta(1+r) = 1$ の場合 c_1 と c_2 の大小関係はどうなるか?
- $\beta(1+r) \neq 1$ であるが $y_1 = y_2$ の場合は c_1 と c_2 の関係はどうなるか?
- 限界消費性向を求めよ

2.6.2 CRRA 効用関数

$t = 1, 2$ について、次のような効用関数を考えよう.

$$u(c_t) = \frac{c_t^{1-\sigma} - 1}{1-\sigma}$$

ここで $\sigma > 0$ (かつ $\sigma \neq 1$) は外生変数である. このような効用関数は CRRA 型と呼ばれ、マクロ経済学で最も標準的な効用関数である*2.

- CRRA 型効用関数が $u'(c) > 0$ かつ $u''(c) < 0$ を満たすことを示せ ($c > 0$ とする)
- CRRA 型効用関数として、 $u(c_t) = \frac{c_t^{1-\sigma}}{1-\sigma}$ という効用関数を考える. この限界効用は、上で定義した限界効用とどのように異なるか確認せよ.
- この限界効用 $u'(c)$ を、対数効用関数の限界効用と比較せよ. σ がどのような値のときに両者は一致するか?
- CRRA 型効用関数の場合の最適化問題を書け
- オイラー方程式を導け
- このときの消費と貯蓄 (c_1, c_2) を解いてみよ
- $\beta(1+r) = 1$ の場合、 c_1 と c_2 の関係はどうなるか?
- $\beta(1+r) \neq 1$ であるが $y_1 = y_2$ の場合はどうなるか? 主に c_1 と c_2 の関係について述べよ.
- 限界消費性向を求めよ

*2 CRRA という名前の由来は、資産価格理論のパートで説明します.

最後に一問だけ、実践的な問題を考えよう。

- 仮に将来所得 y_2 が下がるとする (例えば、景気後退や年金の減額などを想像すると良い)。このとき、貯蓄 s は増えるだろうか減るだろうか。まず数式を忘れて直感的な結論を予想し、数式を用いて確認してみてほしい*3。

2.6.3 2 次効用関数

次のような効用関数を考えよう。

$$u(c) = \alpha c - \frac{\gamma c^2}{2}$$

とする。ここで $\alpha > 0$ かつ $\gamma \geq 0$ (α/γ はとても大きいとする)。このような関数形を、二次効用関数と呼ぶ。

- 2 次効用関数が、特定の範囲で、 $u'(c) > 0$ かつ $u''(c) < 0$ を満たすことを示せ。 $u'(c) > 0$ の範囲を示せ。
- 二次効用関数の場合の最適化問題を書け
- オイラー方程式を導け
- このときの消費と貯蓄 (c_1, c_2) を解いてみよ
- $\beta(1+r) = 1$ の場合、 c_1 と c_2 の関係はどうなるか？
- 限界消費性向を求めよ

2.6.4 CARA 型効用関数

$$u(c) = -\frac{1}{\gamma} \exp(-\gamma c)$$

という効用関数を考える。これは CARA 型効用関数と呼ばれるものである。 $\gamma > 0$ とする。

- CARA 型効用関数が $u'(c) > 0$ かつ $u''(c) < 0$ を満たすことを示せ ($c \geq 0$ とする)
- CARA 型効用関数の場合の最適化問題を書け
- オイラー方程式を導け
- このときの消費と貯蓄 (c_1, c_2) を解いてみよ
- $\beta(1+r) = 1$ の場合、 c_1 と c_2 の関係はどうなるか？
- $\beta(1+r) \neq 1$ であるが $y_1 = y_2$ の場合はどうなるか？
- 限界消費性向を求めよ

2.7 財政政策

二期間モデルと財政政策のパートでは、消費関数を解かなかった。そこで、ここでは消費関数を解くことによって講義を補足する。

*3 ヒント：直感的には貯蓄が増える効果と減る効果の二つが考えられる。

つまり、授業で扱ったケース

$$\begin{aligned} \max_{c_1, c_2} & \log(c_1) + \beta \log(c_2) \\ \text{s.t.} & c_1 + \frac{c_2}{1+r} = y_1 - G_1 + \frac{y_2 - G_2}{1+r} \end{aligned}$$

を解いて、 (c_1, c_2) を求めよ。また、

$$\frac{\partial c_1}{\partial G_1}, \frac{\partial c_1}{\partial G_2}, \frac{\partial c_2}{\partial G_1}, \frac{\partial c_2}{\partial G_2}$$

を求めよ。これらの符号は正か負か確認せよ。乗数効果 ($\frac{\partial c_1}{\partial G_1} \geq 1$) は存在するか？

3 発展：課税政策の分析

3.1 消費税 1

2 期間モデルを用いて、消費税の分析を考えよう。効用関数は、問題で指定するまでは、 $u(c_1) + \beta u(c_2)$ と一般形のままとする。基本的にはこれまでと同様のモデルを考える。

しかし、予算制約に消費税があるとしよう。そして、この消費税は、1 期と 2 期で違う税率でも良いとし、それぞれ税率は τ_1 と τ_2 と書くこととする。このとき、次の問いに答えよ。

- 1 期と 2 期の予算制約を書け
- 生涯予算制約を書け
- オイラー方程式を求めよ。
- 効用関数を対数効用とする。このとき、消費関数を求めよ。なお、 $Y \equiv y_1 + y_2/(1+r)$ とおくことにする。
- $\tau_1 = 0$ かつ $\tau_2 = \tau > 0$ とする。つまり、増税のシチュエーションを考える。このとき、消費関数はどのような形になっているか。特に c_1 と τ の関係に着目し、「駆け込み需要」、「所得効果」、「代替効果」という用語を用いて解釈せよ^{*4}。
- 引き続き、 $\tau_1 = 0$ かつ $\tau_2 = \tau > 0$ とする。ただし、効用関数を CRRA 型 ($u(c_t) = c_t^{1-\sigma}/(1-\sigma)$) とする。このとき、 σ の場合分けをしつつ、前問と同じ分析をせよ (どのような場合分けが必要かは自身で考えること)。

^{*4} 駆け込み需要とは、「税率が上がる直前に消費が増える」という現象のことである。

4 3 期間モデル

経済が三期間続くとしよう。

家計は三期間の消費から効用を得る。そして家計は次の効用関数をもっているとする。

$$\log(c_1) + \beta \log(c_2) + \beta^2 \log(c_3)$$

さらに、家計の予算制約は、それぞれの時点において次のモノとする。

- $t = 1$

$$c_1 + s_1 = y_1$$

- $t = 2$

$$c_2 + s_2 = y_2 + (1 + r)s_1$$

- $t = 3$

$$c_3 = y_3 + (1 + r)s_2$$

つまり、ここでは、利子率は期間を通じて変わらないと仮定している。

このとき、次の問いに答えよ。なお、回答する際には、

$$Y \equiv y_1 + \frac{y_2}{1 + r} + \frac{y_3}{(1 + r)^2}$$

とすると便利である（しなくても良いが、解答例ではそうしている）。

- $t = 2$ のときの予算制約に注目し、 s を貯蓄（額）と呼ぶべきか、資産（量）と呼ぶべきか検討せよ。なお、貯蓄（額）とは所得から消費を差し引くことによって次期に持ち越す財の量であり、資産（量）とは、その時点において持っている財の量である。
- 最大化問題を定義せよ。
- 消費と貯蓄 (c_1, c_2, c_3) を解いてみよ。
- 限界消費性向を求めよ。なお同時点に対するものだけでよい。つまり $(\partial c_1 / \partial y_1, \partial c_2 / \partial y_2, \partial c_3 / \partial y_3)$ を求めよ。
- この 3 期間のモデルと 2 期間のモデルを比較し、パラメータが同じ値の時、どちらの限界消費性向が高いか議論せよ。またこれは現実にも例えるとどのような意味があるか考えてみよ。